様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　3　月　26　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2008
課題番号：18530745
研究課題名（和文）　障害学生との交流に対する健常学生の支援意欲向上教育プログラム作成への包括的研究
研究課題名（英文）　A comprehensive study on developing an educational program for improving nondisabled college students' willingness to help peers with disabilities in their mutual interactions

研究代表者
河内　清彦　(KAWAUCHI KIYOHIKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：50251004

研究成果の概要：講義による障害に関する情報提供の効果は、講義内容よりも情報提供以前の健常学生が示す障害者に対する受容的認知の程度に左右されることが明らかとなった。障害開示による情報提供では、障害者の活動能力を示すポジティブな内容は、それを否定するネガティブな内容に比べると、障害者に対する健常学生の対人認知を改善する効果の大きいことが解明された。これらの効果は、個人的特徴、例えば、性別などによっても影響されることが確認された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合　計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	690,000	4,190,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：情報提供、交流抵抗感、障害開示、対人魅力、印象形成、弱視学生、全盲学生、健常学生

1. 研究開始当初の背景

昨今、特別支援教育の普及とともに、障害学生と健常学生との交流の機会の増加が期待されるにも関わらず、高等教育場面では障害学生を支援する健常学生の数が非常に少ない現状が報告されている。しかし、障害学生に対する健常学生の支援意欲を向上させるのに、どのような情報提供が効果的かについては、明確な結論は得られておらず、教育現場においても試行錯誤的な実践が多くなされている。このような状況の中で、研究代表者は、健常学生の行動を変容させるのに効果的とされている自己効力感(self-efficacy expectation)と障害開示(disability-disclosure)に着目し、わが国で

初めて障害科学の分野での認知変容研究に導入した。

2. 研究の目的

本研究では、教室場面での障害関連情報が健常学生の障害学生に対する認知に及ぼす効果を解明して教育支援プログラムのための資料を得るため、(1)障害関連講義の効果を、受講生の障害学生との交流自己効力感の強度の視点から検討すると共に、(2)3 条件(ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ)下での障害(弱視、全盲)開示が、障害学生に対する健常学生の交流抵抗感と開示者への対人魅力とにどのような影響を及ぼすかを検討する。

3. 研究の方法

本研究は、全て質問紙による集合調査を実施した。

(1)調査参加者: 健常大学生で平成18年度は148 名(男子 60 名、女子 88 名)、平成 19 年度は 182 名(男子 73 名、女子 108 名、不明 1 名)と210名(男子105名、女子103名、不明2名)、20 年度は 270 名(男子 97 名、女子 162 名、不明 11 名)。

(2)障害関連情報: 提示材料としては、平成18年度が、オムニバス形式の心身障害学関連講義、平成 19 年度は弱視学生、平成 20 年度は全盲学生による 3 条件(ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ)下での障害開示文。

(3)測定用具: 使用した尺度としては、平成 18 年度と 19 年度が「交友関係尺度」と「自己主張尺度」(河内, 2003, 2004)、平成 20 年度が「印象形成尺度」(林, 1978)、「情緒的魅力尺度」と「相互作用志向性尺度」(中村, 1988)及び自己開示認知に関する項目。

(注)

・林文俊 (1978) 対人認知構造の基本次元についての一考察. 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233‐247.

・河内清彦(2003).「障害学生との交流自己効力感凡用型尺度」の妥当性の検討―聴覚障害および視覚障害条件の影響についてー特殊教育学研究, 40, 451－461.

・河内清彦(2004). 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52, 437－447.

・中村雅彦 (1988). 非類似者の他者に対する魅力－評価者の寛容的対人態度に関する検討－.実験社会心理学研究, 27, 121‐130.

4. 研究成果

障害関連情報が障害者に対する健常学生の認知にどのような影響を及ぼすかを解明するため、通常の障害関連講義と障害開示の視点から視覚障害学生に対する健常学生の認知傾向を検討した。

(1)平成 18 年度

まず、平成18年度の研究では、オムニバス形式の心身障害学関連講義における学期の最初の授業と最後の授業を受講した学生を対象に、視覚障害、聴覚障害、運動障害(障害条件)と非障害(統制条件)について、「交友関係尺度」と「自己主張尺度」を用いて調査を実施した。

両調査に自主的に参加した148名の大学生の8 尺度の事前・事後尺度得点平均値を対応のある場合のｔテストで比較したところ、1%水準では、統制条件の両尺度で有意な得点上昇は得られなかった。これに対し、障害条件では、視覚障害と聴覚障害に有意な上昇が見られ、運動障害でも 5%水準で有意な上昇が認められた。

次に、事前得点に基づき、調査参加者を自己効力感の強い高得点群 74 名と、自己効力感の弱い低得点群74名に分け両群の8尺度得点平

均値を比較したところ 1%水準で有意差が認められた。そこで、両群別に8尺度の事前・事後得点平均値を対応のある場合の t テストにより比較した。

その結果、事後得点が事前得点よりも 1%水準で有意に上昇したのは、「交友関係尺度」「自己主張尺度」の両下位尺度とも、低得点群の 3 障害条件だけで、統制条件の低得点群に有意な上昇は認められなかった。また、高得点群はいずれの条件においても両下位尺度に有意な得点上昇は認められなかった。

以上の結果から、障害学関連講義の効果は、障害学生との交流に対する自己効力感の強い学生には有効ではない反面、自己効力感の弱い学生の自己効力感を強めるのには極めて有効であることが明らかとなった。特に、従来認知変容が難しいとされる障害者との交流場面での本音の行動に関する自己効力感を高める上で、有効な手段となることが示唆された。

(2)平成 19 年度

18 年度に実施されたオムニバス形式の心身障害学関連講義の効果についての研究結果の問題点を解決するため、学期の最初の授業と最後の授業を受講した 182 名の学生を対象に、視覚障害(障害条件)と非障害(統制条件)の大学生を交流対象と仮定した「交友関係尺度」と「自己主張尺度」への回答を分析した。この際、事前得点に基づき調査参加者を自己効力感の強い高得点群と、自己効力感の弱い低得点群の二群に分け、両群において既存の情報源の種類を比較し、有意差のないことを確認した。次に、尺度得点平均値(Table1,Table2 参照)に基づく多様なt検定の結果によると、講義効果については低得点群では両尺度とも得点上昇は有意であったのに対し、高得点群では得点減少を示すものもあり、講義効果を測定する上での質問紙法の限界が明らかとなった。

Table 1「交友関係」尺度に関する事前・事後調査における低得点群、高得点群の平均値及び標準偏差 (視覚障害条件)

		事前調査		事後調査	
参加者	標本数	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)
低得点群	84	38.8	(6.7)	43.4	(7.7)
高得点群	96	54.1	(4.9)	53.4	(7.6)

Table 2「自己主張」尺度に関する事前・事後調査における低得点群、高得点群の平均値及び標準偏差(視覚障害条件)

		事前調査		事後調査	
参加者	標本数	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)
低得点群	88	26.9	(5.5)	32.6	(8.7)
高得点群	94	42.8	(6.0)	43.3	(9.0)

また、当該講義への興味の程度及び当該講義以外の障害関連講義受講の有無についても両群に有意差は得られなかったことから、講義の内容そのものよりは調査参加者の自己効力感の程度が重要な役割を果たしていることが示唆された。

他方、障害開示の効果を検討するため、210 名の大学生を対象に、1回目は一般の大学生の開示文を、2回目はそれに弱視者による3種類(ポジティブ，ニュートラル，ネガティブ)の障害開示文の一つを加えたものを提示し、上記の「交友関係尺度」と「自己主張尺度」及び自己開示認知に関する項目への回答を求めた。

それらの回答に基づき、交友関係尺度と自己主張尺度の尺度得点平均値をもとめ(Table3 参照)、対応のある t 検定を行ったところ、全ての群で「障害開示」が「一般開示」よりも尺度得点を有意に高めていたが，自己主張尺度では全ての群に有意差は見られなかった。

Table 3 「一般開示」及び「障害開示」における
3群の交友関係尺度と自己主張尺度の尺度得点平均値及び標準偏差

開示	尺度	ポジティブ群 (N=74)	ニュートラル群 (N=74)	ネガティブ群 (N=62)
一般開示	交友関係	32.20(0.70)	31.36(0.75)	33.19(0.95)
	自己主張	29.97(0.65)	28.68(0.68)	29.24(0.81)
障害開示	交友関係	42.91(8.05)	39.15(8.95)	38.77(7.87)
	自己主張	29.76(7.87)	27.57(7.36)	28.65(6.85)

注）( ) 内は標準偏差を示す.

従って，「障害開示」は，表面的な交流場面では有効であっても，親密な交流場面では効果の小さいことが明らかとなった。

一方，自己開示認知の望ましさの評価が高まるほど，「障害開示」の効果は大きくなることから，ポジティブな「障害開示」の重要性が指摘されたが，ネガティブな内容にも効果は認められており，必要に応じてネガティブな「障害開示」も積極的にすることの意義が提言された。

(3)平成 20 年度

しかし、上記の結果だけでは十分な成果が得られたとは言えなかったため、平成 20 年度も引き続き障害開示に焦点を当て、全盲学生による 3 種類の障害条件(ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ)下での障害開示の内容が対人魅力にどのような影響を及ぼすのかについて考察した。

まず、3 つの障害開示条件がどのように認知されるかを、開示認知項目(望ましさ、内面性、取り入りの動機、真正性、迷惑さ)を用いて検討した。

その結果、望ましさと迷惑さの点で、ポジティブ条件とネガティブ条件はほぼ正反対の内容を示し、ニュートラル条件は両者の中間に位置する内容であることが示された。

したがって、本研究で設定した 3 障害開示条件の開示内容の操作は有効であったと判断した。

次に、個人的特徴(性別、専門領域、接触経験)における各障害開示条件の認知評価と既存の 3 尺度(印象形成尺度、情緒的魅力尺度、相互作用志向性尺度)との関連を比較検討した。(Table 4,Table 5 ,Table 6 参照)

Table 4 印象形成尺度の3障害開示条件における平均値と標準偏差

	ポジティブ条件	ニュートラル条件	ネガティブ条件
性別			
男	37.92	31.92	24.34
	(5.87)	(5.80)	(4.33)
女	40.35	33.01	24.19
	(4.98)	(5.96)	(4.90)
専門領域			
専門群	39.72	32.74	23.83
	(5.79)	(4.96)	(5.06)
授業群	39.51	32.72	24.45
	(5.91)	(6.36)	(4.65)
非専門群	39.07	32.24	24.16
	(4.00)	(5.68)	(4.45)
接触経験			
接触大	39.30	32.58	24.20
	(6.12)	(6.08)	(4.83)
接触小	39.93	33.16	24.42
	(4.41)	(5.04)	(4.38)
接触なし	38.91	31.89	24.06
	(6.10)	(6.73)	(4.97)

( ) 内は標準偏差

Table 5 情緒的魅力尺度の3障害開示条件における平均値と標準偏差

	ポジティブ条件	ニュートラル条件	ネガティブ条件
性別			
男	48.78	46.06	38.49
	(8.96)	(10.34)	(10.85)
女	52.51	49.18	38.59
	(8.94)	(9.13)	(10.31)
専門領域			
専門群	50.41	47.30	38.78
	(8.71)	(9.58)	(12.09)
授業群	51.20	48.57	38.99
	(9.45)	(9.20)	(10.09)
非専門群	51.51	47.43	37.48
	(8.74)	(10.75)	(9.90)
接触経験			
接触大	52.60	47.63	39.32
	(8.69)	(9.47)	(11.58)
接触小	51.58	50.01	38.34
	(9.03)	(8.88)	(9.18)
接触なし	49.48	45.70	38.31
	(9.29)	(10.35)	(11.29)

( ) 内は標準偏差

Table 6 相互志向性尺度の3開示条件における平均値と標準偏差

	ポジティブ条件	ニュートラル条件	ネガティブ条件
性別			
男	35.28	35.25	34.12
	(7.39)	(8.28)	(8.66)
女	38.51	37.54	35.60
	(7.04)	(6.98)	(7.88)
専門領域			
専門群	37.80	37.30	35.61
	(7.87)	(8.02)	8.70
授業群	36.90	36.44	35.25
	(7.37)	(7.63)	(8.23)
非専門群	37.67	36.81	34.30
	(6.82)	(6.99)	(7.86)
接触経験			
接触大	38.68	37.52	36.15
	(7.02)	(7.16)	(8.10)
接触小	37.80	38.01	35.51
	(6.74)	(7.11)	(7.01)
接触なし	35.66	34.49	33.79
	(8.00)	(7.89)	(9.57)

( ) 内は標準偏差

その結果、ポジティブ条件についてみると、性別の要因では、女子の方が男子よりも望ましさ・真正性の認知評価が有意に高く、開示者に対し友好的な印象を示していた。専門領域の要因では、障害学を専攻していない学生は、ポジティブな開示内容であっても否定的な印象を抱いていることが示された。接触経験の要因では、障害者との接触経験のない人は、ポジティブな開示内容であっても否定的に捉える傾向が見られ、障害者の相談に乗ったり、障害者に悩みを打ち明けたりするなど、障害者と深く関わることに抵抗感の強いことが示された。

ニュートラル条件についてみると、性別の要因では、男子の方が女子よりも迷惑さの認知評価が有意に高く、女子の方が男子よりも開示者に対し打ち解けやすいことが示された。専門領域の要因では、対人魅力への影響は見られなかった。接触経験の要因では、接触経験のない人の方がある人よりも内面性の認知評価が有意に高かった。これは、接触経験のある人はニュートラルな開示内容を普段通りの行動であると見なしているのに対し、接触経験のない人は障害に関する新しい情報を与えられ、プライベートな内容だと判断したためだと解釈される。

ネガティブ条件についてみると、個人的特徴からは認知評価と3尺度に特徴的傾向は見られなかった。

最後に、対人魅力について、個人的特徴に基づき、障害開示条件間で比較検討した。その結果、3 尺度のほとんどで、ポジティブ条件＞ニュートラル条件＞ネガティブ条件の順に尺度得点が有意に高かった。この関係は、ほぼすべての個人的特徴に見られた。以上のことから、障害開示を行う場合には、望ましい内容の開示をする方が対人魅力を増大させることにつながることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕（計 1 件）

相羽大輔(代表)・河内清彦 晴眼学生の交流意欲に及ぼす弱視学生の自己開示の効果に関する研究、日本特殊教育学会第 44 回大会、2006 年 9 月 16 日、群馬大学

６．研究組織

(1)研究代表者

河内　清彦　(KAWAUCHI KIYOHIKO)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：50251004

(2)研究分担者

無

(3)連携研究者

無